

第Ⅲ部

総合討論

総研大アーカイブズの 将来構想をめぐって

●アーカイブズのルーツ的な役割を果たした基研

平田 これまでのセッションを通じて今年度までの成果が報告されました。今後も基本的には、この方向で進めていきたいと考えています。特に物理系の共同利用機関の場合は、基研がルーツ的な役割を果たしていますが、昔から資料委員会があると聞いています。今日は、九後所長がいらしますので、そのあたりの事情を簡単に説明していただければと思います。

九後 1979年に、アメリカのローリー・ブラウン(Laurie Brown)という人が関わった何かの作業があったらしく、日本もアーカイブズをつくるべきだという意見があり、それでいわばアメリカの「圧力」で、8月に史料室委員会が発足しました¹。そのときの委員は、基研のほうは牧二郎先生と小沼通二先生、京大の物理教室のほうから田中正先生と町田茂先生。それ以外には、大阪医科大の河辺六男先生などがメンバーでした。

史料室委員会で幸運だったのは、資料を探しはじめた直後の10月に、物理教室の図書館の隅にダンボール箱があり、その中に湯川先生のノーベル賞論文の手書き原稿など貴重な資料があったことでした。それはいまだに宝物となっています。上野の科学博物館で始まった湯川・朝永生誕 100

1 小沼注：シカゴの南部陽一郎さんとLaurie Brownさんから、早川幸男さんに、「日本の素粒子論に誕生と発展について、協力して分析したい」という連絡があり、学振とNSFのプロジェクトとして、1978-1979年と1984-1985年に私たちも参加して共同研究を進めました。そのときにBrownさんからアーカイブ設立を勧められたのが、基礎物理学研究所の湯川記念館史料室のルーツです。

年記念の展示の中でも第一級の資料です。

その後しばらく、小沼、河辺両先生が中心になって資料整理をしていただいていたのですが、小沼先生が慶応大に移られた後は、河辺先生がずっと長い間、亡くなる直前まで資料整理をされていました。整理された目録リストは素研（雑誌「素粒子論研究」）に順次掲載され、1から8まで出しています。

河辺先生亡き後は開店休業状態でしたが、2000年ごろ、ノーベル賞設置100周年を記念して、ノーベル賞委員会から基研にコンタクトがあり、その関係で史料室委員会が少し活動を再開しました。私が所長に就任して、2007年3月で丸4年になりますが、その間、史料室委員会は一度も開いていません。ただ、湯川・朝永生誕百年記念展示では少し協力しました。ここ数年は、いろいろな出版社、新聞などのメディアから写真の掲載許可を求められることが多く、許可を与える仕事をしている程度です。

基研の所長は史料室委員会の委員を兼ねるという規定があり、他に委員としては所員1～2名、OBとして田中先生が入っています。小沼先生は委員ではありませんが、ずっと相談にのっていただいています。

アーカイブズに関して多少動きがあったのは、生誕100年にからんで、阪大から依頼があったことです。湯川先生は阪大時代にノーベル賞の第一論文を執筆したのですが、その資料も全部京大が保有しています。ですから、阪大にはまったく資料がないわけです。そこで、阪大時代のデータで基研が所有しているもの、しかも史料室の目録に入っている資料について、まずデジタル化したいという依頼を受けました。その際、デジタル化は阪大が行い、そのデータは基研、阪大で共有して、内部利用は自由というふうに取り決めました。外部利用についてはその都度基研に許可

を得るということにしました。こうして阪大関連の一部資料のデジタル化の作業は、阪大の博物館の人がスキャナーとデジカメを持参して行いました。全体のデジタル化はまだされていませんし、残された資料の整理もまだ手がつけられていません。

私自身は、この4月から所長でなくなるので、もう少し時間をかけて史料室委員会の仕事ができるかもしれないと思っています。

もう一つ、外的状況として深刻な問題になりそうなのは湯川記念館で、1952年に建設され、すでに半世紀以上経過しているため、耐震強度が低いものについて改修する建築物の対象になっていることです。今年度中に改修するのですが、湯川記念館の一室が史料室になっていて、未整理のままのダンボール箱があり、その移転に困っています。とりあえず新館の地下室に移転することは決め、コンビネーションを変えないように移転しようとしています。基研では、責任をもつ人がいないため、資料が散逸するリスクもあります。そこで専門家のいる文書館に移管すべきかどうか検討していかなければならないと思います。今回、この研究会に参加して、どの研究所も自分たちの手で一生懸命やられているのを目の当たりにしまして、基研も、これからもっと真剣に考えていかなければならないと感じています。

小沼 今のお話を少しだけ補足させていただきます。湯川先生の写真がたくさんあるということですが、先生は物理界の巨人であるにとどまらず、日本全体のカリスマ的存在でもあったわけですね。1981年に亡くなられて1ヶ月後に、基礎物理学研究所で講演会と展覧会をしましたが、展覧会の責任者は私だったものですから、湯川家と話をつけ、先生のアルバムを自由にどこでもコピーしていいという承諾をと

りました。その後、湯川・朝永生誕 100 年記念のとき、デジタル写真をとりたいとお願いしました。そういうわけで、写真が何百枚もあるのです。もちろんもともとは湯川家のものですが、管理は基礎物理学研究所が行っています。そういう特殊事情があり、たしかにユニークなコレクションになっています。

平田 展示会などを開くのはいい機会になりますね。資料もそれによって整理が進みます。

中井 嗟峨根遼吉先生の追悼文集に座談会の記録があるのですが、そこにとってもたくさん情報がもりこまれています。そういう意味では、展示会もいいですが、座談会も非常にいいものだと思います。

●各研究機関のアーカイブズの連携が重要

平田 基研、宇宙線研、プラズマ研など、戦後の基礎科学を担った共同利用機関は一体のものとして歴史を考えていかなければならないと思います。伊藤憲二さんの歴史研究プロジェクトはそこまで広げると、100 年計画になってしまうかもしれません……。

今後の予定ですが、来年度からは総研大のプロジェクトの代表は伊藤さんをお願いしています。私はオーラルヒストリーを担当しますし、さらにサイエンス・コミュニケーションに関心があり、こちらでもプロジェクトを立ち上げていきたいと考えています。今回の研究会でも明らかなように、アーカイブズは、広報、コミュニケーション、異分野連携などにおいて、とても重要な役割を果たしています。これらはすべて「人間と科学」プロジェクトの一環として推進していますが、池内了さんが「科学と社会」プロジェクトを立ち上げるので、科学と社会の原理論的な部分と、

サイエンス・コミュニケーション、アーカイブズがそろふこととなります。

現在、科学と社会の問題がいろいろ指摘されていますが、社会に科学や科学者のあり方を伝えるためにも、自分たちの歴史を正確に知っていなければ信用されません。科学と社会の関係を考える上でも、アーカイブズの役割は非常に重要です。そういう意味で基礎財産としてきちんと整備していかなければなりません。

なかでも大事なのは、アーカイブズの連携です。EAD 化が進み、共通資料化が可能になりましたので、来年度以降は、まずそれぞれの資料の EAD 化を進めることとなります。それにはマンパワーが必要なので工夫しなければなりません。たとえば核融合研のように、ファイルメーカーで作れば自動的に EAD 化されるなどのシステムを利用すれば、省力化もできると思います。宇宙線研、基研などの資料も EAD 化して、一部でもよいので共有化していきたいですね。

それらがモデルとなって、他の研究所にも波及していけばいいなと思います。今のところ、核融合研、KEK、分子研が先行していますが、その他の基盤機関にも進めていく必要があります。後 3 つくらいは始まるようにしたいものです。そもそも自然科学研究機構は、アーカイブズの整備を中期目標に入れているので、なんらかの動きはあるでしょう。ただきちんとするためには連携して進めていく必要があります。

その他来年度の方針として、プロジェクトの宣伝をしていく予定です。個々の学会などで発表していますが、もっと組織的に行う必要があると思います。たとえば物理学会、アーカイブズ学会、オーラルヒストリー学会、STS 学会など、関連する他の学会にも働きかけ、アピールしていきたいと思います。注目されれば参加希望者も出てきて作業も

進みますので、自分たちにもプラスになるでしょう。その他、どんな学会があるでしょうか。化学会はどうですか。

—— 日本化学史学会もあると思いますが。

中井 私は、黒田晴雄先生から化学者の昔話を聞く機会に恵まれたのですが、池田菊苗先生という味の素の発明で有名な先生は、科学と社会という問題についてとても熱心だったそうで、長倉三郎先生のお考えによく似たことを話しておられたそうです。長倉先生には、いろいろと教わり、啓発されたことが山のようにありますが、化学には昔からそういう伝統があったのだなと感心したことがあります。

平田 化学のほうでは公害などの問題があり、社会の問題を扱う意識が強いようです。

●葉山にアーカイブズ拠点の構築をめざす

高橋 すばる望遠鏡については、すばる計画のころのものも含めてDVDをつくっています。重要なことは、国の研究機関が、他の国の土地を借りて施設を建てていることです。すばるはハワイ大学の土地に建てられていますが、不動産の問題は大蔵省にとって大問題だったわけです。それらを解決して建設したのですから、そのへんの苦労話も小平先生などに聞いておくべきだと思います。ぜひアーカイブズとして、すばるに取り組んでいただきたいものです。

平田 すばる望遠鏡については、来年度、オーラルヒストリーを実施する予定です。科学者から見た問題だけでなく、ハワイの原住民にとっての影響などについても聞き取り調査を行う予定です。あそこは、彼らにとっては聖地ですから、そこに望遠鏡のような施設を建設していいのかという問題もあり、それらを解決してつくったわけです。それから、天文台と極地研は、科学映像として多くの映像を制作して

います。ところが、ほとんど岩波映画かNHK番組で有料のため利用できないのです。そこで、自前でつくるべきだという議論が出てきました。

中井 何のためのアーカイブズか——学問の歴史を調べるのか、社会との関わりを考える人間的側面を調べるのか——ですが、私は後者に関心があります。

平田 それにはいろいろなスタンスがあつていいと思いますが、少なくともまず研究所の歴史を調べることが出発点でしょう。

高橋 なんとか総研大に隣接する広大な敷地を確保していただいて、人間と科学のための博物館や資料館をつくられる努力をしていただきたいものです。ここ(葉山キャンパス)は富士山がよく見えて、非常にいい景観なので、ぜひそうした施設を実現してもらいたい。各研究所から少しずつ建設費を協力してもらおうなどの方法はあるでしょうね。

中井 私は、国から金を出してもらって“親方日の丸”で進めるのがいいかどうか、基本的な疑問があります。“民”の力でやるべきだと思います。“国”の金をあてにすると、いろいろな限界が出てきます。そこは非常に大きな分かれ道でしょう。

平田 8億円構想は次の段階の問題として、まずは総研大のアーカイブズ組織をオフィシャルなものとして立ち上げる必要があります。高エネルギー研、核融合研などの実例を参考に提案していきたいと思っています。このプロジェクトは6年計画の3年目に入ったところですが、プロジェクトの後の保障はできませんので、それまでに公的なものとして整備していかなければならないだろうと考えています。

高橋 アーカイブズを整備するためには、総研大の中にきちんとした組織をつくり、体系的な方法で進めていくことが大事です。

平田 制度的な整備、人員、予算が必要です。今のところ、人と

予算はともかく、制度的な整備が遅れています。アーカイブズがなぜ重要かについて、プロジェクト外の人を説得するためにも材料が必要ですから。

高橋 ボランティアだけでは限界がありますからね。
中井 人のプロモーションが重要ですね。アーカイブズ活動をすることにどんな意義が見出せるかです。

●アーカイブズ認知の高まりとアーキビスト養成の動き

平田 現在、あちこちでサイエンス・コミュニケーターを養成していますが、そういう人たちが働く場があるかどうかという問題があります。しかし就職できそうにないから、そういう人材を養成すべきではない、ということではないでしょう。なかなか難しい問題です。アーキビストがもっと必要だという意見は多いのですが、養成しても就職できるか、という問題があります。本当にアーカイブズの重要性を認めるなら、アーカイブズが必要だということで、そういう人材を雇っていくしかないでしょう。そのためのきちんとしたロジックを共有していかなければなりません。

中井 昔、久保先生が「中抜き大学」という考えを提案されたことがあります。つまり、年寄りと若者で大学を構成し、社会で活躍してもらいたい中間世代の人達には自分の研究に専念し、熱中してもらおう。という考えです。アーカイブズなども高齢者にがんばってもらいたいし、また少数でも関心のある若者は大事に育てていく——そういうポリシーに基づくシステムが非常に大切だと思いました。

安藤 アーキビストの話が出ましたので、最近の状況をご紹介します。2007年度アーカイブズ学会の研究会の発表者の顔ぶれを見ますと、大学院生がかなり多く、映画産業、建設、行政文書など、いろいろな分野

にまたがっています。そういう意味では、アーカイブズはあらゆる分野にありうるものです。かつては公文書館、図書館などが担っていましたが、アーカイブズ研究がいろいろなところで少しずつ動いていることを認識いただきたいと思います。今回参加された方々も、ぜひ共同研究活動に参加していただき、こういう機会に発表していただきたいと思います。また平成20年4月には、学習院大学の中に人文科学研究科アーカイブズ専攻が誕生します。これは、おそらく日本で初めてのアーキビスト養成専攻になると思います。ぜひ、そういう人材を採用してほしいですね。

平田 そこで博士が出るころには、8億円構想が実現しているかもしれませんが。

—— 博士号をとってアーキビストになるためには、どんな勉強ををするのでしょうか。

安藤 資料の収集、整理、保存などアーカイブズにかかわることが中心になりますね。ちなみに、アーカイブズ学会があるのは、私の知るかぎり、中国、韓国、日本のみなんです。欧米はアーカイブズの歴史は長いのですが、学会というかたちでは整備されていません。そういう意味では、東アジアが学問的には世界をリードしようと意欲的です。日本の場合も、学習院1つだけではどうにもならないので、まとまった研究・教育組織が必要ですね。

平田 今でも、国文学研究資料館ではサマースクールなどで、かなりヘビーな研修を積んでいますね。このプロジェクト関係者も何人か研修に参加させていただいて、実際に業務に活用しています。総研大は先端科学の基礎基盤的研究機関や、国文学研究資料館のような組織もありますので、協力しあって、両者の資源をうまく活用することが大事だと思います。